

近代初頭における天龍寺境内地の景観とその変化

小 林 善 仁

〔抄 録〕

寺社を中心に形成された地域を研究するにあたり、その景観に影響を与えた事象として、近代初頭の境内地処分に注目し、境内地処分の関係資料と寺院側の資料を用いて、近代初頭における天龍寺境内地の復原と近世から近代にかけて生じた景観の変化を検討した。

近代初頭までの天龍寺境内地は、堂宇・塔頭などの建つ境内主域と門前集落などからなる境内付属地で構成されていた。しかしながら、明治初年の境内主域では、火災や塔頭の廃止などを理由に空地の状態の塔頭敷地が多く見られ、これらの土地が境内付属地と共に二度の上地令で境外として収公され、公有地や民有地となった。

民有地化した旧境内地は、天龍寺を介さずに住宅建設などの活動が行えるようになったことで旧塔頭敷地や藪地などが宅地や耕作地に変化した。また、同時期の境内主域では開墾と茶の栽培が行われており、景観の変化は旧境内地だけでなく、境内においても発生したことが確認された。

キーワード 境内地、絵図、上地、景観変化、天龍寺

1. はじめに

寺院や神社は、境内と呼ばれる宗教的空間をもち、その内部は堂宇・社殿や墓地・広場などで構成されている。信仰あるいは観光の対象として多くの人々を集める寺社の中には、山門や鳥居の周辺に商店や飲食店が軒を連ねるものも数多い。こうした寺社を中心に形成された地域は、境内・寺内・門前などと呼ばれ、都市の形態を見せるものは寺内町・門前町として、様々な分野で研究の対象となっている。取り分け、歴史地理学の分野では、藤本⁽¹⁾による伊勢神宮門前地域の研究を始め、近世の門前町の形態や景観、空間構造に関する研究において成果が蓄積されている⁽²⁾。これらの研究が進展してきた背景には、門前町を近世都市の一類型と捉える姿勢が存在しよう。

こうした研究動向に対して、渡邊は近世門前町への研究の偏りを指摘し、近世から近代への門前町の変容と近代の門前町を対象とした研究を残された研究課題に挙げている⁽³⁾。この指摘

を受けて既往の研究を顧みると、まず前近代から現在まで続く門前町の研究が大勢を占め、近代以降に形成された門前町の研究が僅少であるという研究状況が見えてくる。また、これらの研究は近世の状態のみを検討しているため、考察が近代以降にまで及ぶものは極めて少ない。さらには、研究の対象が現在も門前町の形態・景観を表わしているものに限られ、過去から現在に至る過程で住宅地や農地といった門前町以外の景観へと変化したものについては、研究の対象から外されている。

ここで、研究史の概観から一旦離れて、前近代の寺社とその境内に目を向けたい。すると、寺社は、堂宇や社殿が建ち並ぶ境内主域の他にも、その周囲に宅地・耕作地・山林からなる境内付属地をもち、現在よりも広い範囲の土地を境内としていたことが知られる⁽⁴⁾。つまり、前近代と近代以降における境内に対する理解、とくに空間的な広がりに対する理解が異なっており、既往の門前町研究で対象とされてきたものは、上記の境内付属地の一部に当たる。そのため、従来の門前町という捉え方では、寺社を中心とした地域の一部が研究されるに止まり、境内と呼ばれたまとまりある地域の全体像を把握するためには、前近代に境内と呼ばれた地域、すなわち境内地という視点で研究する必要がある。

この境内地を対象として、明治初期に実施された政策がいわゆる境内地処分であり、この時に寺院や神社の境内地は、今日の境内の範囲である境内主域に限定されている。筆者は、境内地処分が寺社を中心として形成された地域の景観に影響を及ぼす契機になったと仮定し、これまでに大覚寺⁽⁵⁾と天龍寺⁽⁶⁾の境内地を対象として当該期の境内地の復原と境内地処分の状況を検証してきた。しかし、前稿で近代初頭の天龍寺境内地を復原した際に、資料上の問題から近世から近代への変化に関する検討が不十分なまま終わっている。取り分け、前稿で復原した天龍寺の境内地は、第2次上地令に伴う境内地処分時のものであり、これに先立って行われた第1次上地令に伴う処分の様子は明らかにできていない。また、明治初年には境内地処分の他にも神仏分離や廃仏毀釈、寺社の整理・統合などが行われており、こうした政治的・社会的な動向⁽⁷⁾に伴う変化が天龍寺境内地でも生じたものと予想されるが、この点についても未検討である。この点を解明するためには、可能な限り変化が起こる直前の境内地の状態を復原する必要がある。

前稿では、景観復原に用いる地図資料が乏しい当該期にあって、境内地処分に関係して作成された地図資料に注目し、処分の過程で作成された地図や処分結果を取りまとめた関係書類を用いるなどして境内地の復原を行った。しかしながら、一方で資料的限界も存在し、境内地処分関係の地図資料に表されない事物については検討できておらず、境内地の景観復原は一部に止まっている。そこで、本稿では前稿に引き続き、天龍寺境内地を対象として景観の復原とその変化について検討するが、上記の課題を克服するため、境内地処分に関係する資料の更なる調査を実施した。これまでは、境内地処分関係資料を保管する京都府の資料を主に利用してきたが、本稿では境内地処分のもう一方の当事者である天龍寺の資料と境内地処分関係資料とを

使用して、近代初頭における天龍寺境内地の景観を復原し、近世から近代へと移行する中での変化を考察していく。

2. 近世後期の天龍寺境内地とその門前

(1) 幕末期天龍寺の状況

地域の近代の変容を考える際には、直前の時期の状況を復原する作業が必須であり、それを行うためには当該期の地図資料の存在が不可欠となる。しかしながら、幕末期の天龍寺境内地とその周辺を描いた絵図は、管見の限り確認されていない。そこで、嘉永3(1850)年に作成された「絵図目録」⁽⁸⁾を用いて、まずは当時の境内主域の状況を概観する。なお、「絵図目録」とあることから、対応する絵図の存在が想定されるが、『天龍寺文書』の中にそのような絵図は残されていない。

「絵図目録」によれば、嘉永3年の段階で天龍寺の塔頭は42ヶ寺ある(表1)。そのうち天龍寺と臨川寺の境内に位置するものは30ヶ寺あり、その内訳は輪番所常住分として臨川寺・雲居庵・多宝院・三會院・景德寺、「天龍寺惣地坪之内」として喜春軒など18ヶ寺、「臨川寺惣地坪之内」として金剛院など7ヶ寺が記されている。なお、天龍寺・臨川寺境内以外に位置する塔頭は、「所々散在塔頭分」として鹿王院や招慶院など12ヶ寺である。

前記の通り同時代の絵図が存在しないため、嘉永3年の塔頭の配置状況を確認することはできない。そこで、時代は遡るが安永5(1777)年に作成された「天龍寺境内惣支配所六ヶ村龜絵図」⁽⁹⁾を用いて、安永期の状況をみてみたい。なお、「龜絵図」はその図題から天龍寺が「境内」として支配していた村々を対象として描いたものと推察される。本稿が対象とする境内(境内主域とその付属地)の他に、「境内」として把握された異なる領域が存在したものと推定されるが、紙数の都合もあるため、この点は別稿にて論じたい。

「龜絵図」では、渡月橋から北へ延びる長辻(現、長辻通)より西側の天龍寺築地内が「天龍寺」とのみ記され、詳細を窺い知ることが出来ない。これに対して、長辻の東側には「臨川寺惣地坪之内」とされた諸塔頭が描かれ、天龍寺惣門前から渡月橋までの間に金剛院・吉祥庵・梅陽軒・福寿庵と続き、瀬戸川沿いには右岸に景德寺、造路を挟んで華藏院・寿寧院が並び、左岸の造路南側には華徳院が寺地を占めている。安永期と嘉永期とでは約70年が経過しているため、塔頭の位置に移動も見られようが、何れにしても「天龍寺惣地坪之内」とある塔頭は天龍寺の築地内にあり、「臨川寺惣地坪之内」とある塔頭の幾つかは天龍寺門前の集落と麓を連ねる状況にあったと推定される。

天龍寺に大きな変化が訪れるのは、「絵図目録」が作成された11年後の元治元(1864)年である。同年7月20日、前日に禁裏御所周辺で発生した禁門の変(蛤御門の変)に関連して薩摩島津家の軍勢が来山し、直前に毛利家の軍勢が滞陣したことを理由に境内を搜索した後、砲

表1 天龍寺塔頭一覧（嘉永3年）

No.	塔頭名	所在	備考	
1	臨川寺	山城国葛野郡嵯峨	輪番所常住分	
2	雲居庵	天龍寺境内		
3	多宝院			
4	三會院	臨川寺境内		
5	景德寺	—		
6	喜春軒	天龍寺境内	天龍寺惣地坪之内	
7	弘源寺			
8	維北軒			
9	慈濟院			
10	南芳院			
11	禪昌院			
12	松岩寺			
13	妙智院			
14	三秀院			
15	養清軒			
16	真乗院			
17	永明院			
18	龍昇院			
19	栖松軒			
20	宝徳院			
21	華藏院	臨川寺境内	臨川寺惣地坪ノ内	
22	逸休庵			
23	栖林軒			
24	金剛院			
25	吉祥庵			
26	梅陽軒			
27	福寿庵	山城国葛野郡嵯峨	処々散在塔頭分	
28	蔵光庵			
29	寿寧院			
30	華徳院			
31	鹿王院	山城国葛野郡嵯峨		
32	正圓庵	鹿王院境内		
33	瑞応院			
34	宝寿院	山城国葛野郡嵯峨		
35	法苑寺			
36	招慶院			
37	宝篋院			
38	西芳寺	山城国葛野郡松尾谷村		
39	地藏院			
40	延慶庵	地藏院境内		
41	龍濟軒			
42	崇恩寺	山城国乙訓郡物集女村		

—…記載無し

※嘉永3（1850）年「絵図目録」（『天龍寺文書』No.1464）より作成。

撃を加えた。戦火に見舞われた天龍寺の状況を記した寿寧院住職の日記によると、法堂・客殿・大小庫裡・書院・開山堂・侍真寮・土蔵・僧堂（雲居庵）・多宝院（聖廟）、塔頭の松岩院・妙智院・真乗院・永明院・三秀院が焼失し、大堰川畔の洗心亭や三軒屋も類焼⁽¹⁰⁾しており、伽藍の西半部を焼亡する大火であったことが分かる。天龍寺では、焼失を免れた禅堂を仮本堂、臨川寺の方丈を仮方丈として仏事を営み、焼失した塔頭も永明院と三秀院が慶応2（1866）年に再興されたものの、僧堂などの堂舎や他の塔頭は再建されないまま明治初年に至った⁽¹¹⁾。

（2）天龍寺門前と境内地

天龍寺を中心として形成された地域に、天龍寺門前がある。天龍寺門前は、文化11（1814）年の段階で村高が216石余あり、そのうち9割強の202石余を天龍寺領分が占めた⁽¹²⁾。残りの約14石は大覚寺領・阿野殿家領・二尊院領であるが、「地頭天龍寺惣支配之場所ニ而、一円天龍寺百姓ニ御座候」とあることから、天龍寺との結び付きの強さが窺え、その村名が示す通り天龍寺の門前に位置した。

天龍寺門前については、広義と狭義の二つの天龍寺門前⁽¹³⁾の存在が指摘され、前者は天龍寺の門前に位置する立石町・造路町・毘沙門町・法界門町であり、後者は前記の4町に山本村と小溝村を加えた地域の総称とされる。天龍寺門前についても、管見の限り幕末期の絵図が確認されていないため、当時の状況を絵図から検討することはできない。そこで、前節と同様に「匳絵図」から天龍寺門前の集落の位置や街路の状況を把握し、近世後期に作成された村方文書や名所案内記⁽¹⁴⁾を用いて、幕末期の様子を概観する。なお、街路の状況については、明治18年頃の『官有地籍図』⁽¹⁵⁾で「匳絵図」作成以後の新道開削の有無を確認したが、目立った変化は見られず、近世後期の街路が近代初頭まで続いていたことが分かった。

「匳絵図」を見ると、長辻に沿って北から順に毘沙門町（現、嵯峨天龍寺立石町毘沙門天付近）・立石町（現、嵯峨北造路町立石地藏尊付近）の町名と集落を示す屋根形が記される。立石町の先は、天龍寺惣門前に金剛院があり、造路を挟んで南へ福寿庵まで塔頭が続き、そこから渡月橋北詰まで並木が続く。造路沿いには、金剛院と瀬戸川に架かる龍門橋までの両側に集落が描かれ、龍門橋の東側やや離れた位置にも若干の屋根形が見られる。町名は記されていないものの、造路町（現、嵯峨天龍寺北造路町南部・造路町北部）と法界門町（現、嵯峨天龍寺龍門町付近）がこれに当たる。「匳絵図」には、龍門橋西詰に門が描かれているが、名所案内記には「法界門 天龍寺の門也」とあり、天龍寺の東の入り口に当たる門の存在が知られる。造路は法界門の東で分かれ、北の道は小溝村へと続き、南の道は小屋町を通り大堰川左岸へ達する。

以上の通り、近世後期の天龍寺門前は、毘沙門町・立石町・造路町・法界門町の集落が惣門前を屈曲点としてL字形に展開していたことが「匳絵図」から分かった。このように天龍寺と天龍寺門前の集落は、境内主域と境内付属地の宅地の位置関係にあると言えるのだが、境内

地処分関係資料のうち、明治17・18年頃の天龍寺旧境内地を描いた「社寺境内外区别図」⁽¹⁶⁾を用いて旧境内地の範囲を確認すると、天龍寺門前の集落の一部は旧境内地に含まれているものの、その他は境内の外であることが分かる。具体的に言えば、立石町と造路町が旧境内地内であり、毘沙門町と法界門町が境内地から外れる。

3. 近代初頭の天龍寺境内地

(1) 明治初年の変革と天龍寺

天龍寺の境内地処分が行われた近代初頭という時期は、寺院や神社をめぐる状況が著しく変化した時でもあった。慶応4（1868）年の神仏判然令に基づく寺院と神社の分離と寺院や仏像を毀損する廃仏毀釈は、この変化の最たる例として広く知られ、この他にも寺院の整理統合や寺社の境内地の限定など様々な政策が実施されている。

天龍寺の所在する山城国の寺院と神社は、慶応4（1868）年3月より京都裁判所（後の京都府）の支配となり、明治元年11月に社寺録の改正を目的として寺院や神社の調査を実施する旨が通達された⁽¹⁷⁾。京都府は、寺社に対して所在地・宗派・寺社の領地・除地などを記録した取調書と麓絵図の提出を求め、天龍寺では通達の翌月に「取調書上帳」⁽¹⁸⁾を作成し、提出している。京都府へ提出された取調書などは簿冊にまとめられ、『社寺録』⁽¹⁹⁾として現存する。

「取調書上帳」は、冒頭に執奏・寺領・除地などを記し、境内の略図に続いて「門内塔頭」「門外塔頭」の項を設けている。このうち、亀山と瀬戸川の間を範囲とする略図からは、明治元年の状況を読み取ることができる。略図を見ると、龍門橋西詰に門の描写があり、「惣門」と記されている。天龍寺の惣門は、現在、長辻通から天龍寺に入る入口の門（総門）であるが、前記の法界門の所に「惣門」とあることから、塔頭に付された門内・門外とは惣門（法界門）の内外を指すと考えられる。略図では、天龍寺築地内と臨川寺周辺の塔頭を門の描写によってその位置を記し、客殿や浴室など建物の配置も記されている。伽藍西半部に注目すると、「甲子年焼失仕候」の表記が松岩寺・妙智院・後醍醐帝聖廟（多宝院）・三秀院・真乗院・永明院にあり、元治の兵火における塔頭の罹災状況が窺える。また方丈・法堂・雲居庵には「焼跡」とあり、方丈には「仮」と付されている。仏殿・山門・吉祥庵には「跡」と記されているが、これらは元治の兵火では罹災していない。

明治元年の段階で、罹災塔頭のうち再建していたのは三秀院と永明院のみであることから、「焼失」「焼跡」と記された建物や塔頭は名称こそ記されているものの、再建された2院以外は建物の無い空地の状態であったと推察される。さらには「取畳」と記された塔頭が宝徳院⁽²⁰⁾・龍昇院・梅陽軒・福寿庵の4ヶ寺あり、「取畳」とは建物の廃止や取り壊しを意味すると思われることから、これらの塔頭は明治元年の段階で建物の存在しない状況にあったと推察される。景観の面では、復旧の進まない罹災塔頭と同じく空地の状態とみられるが、前者が火災という

不慮の事態で建物を失い、再建を目指している状態であるのに対して、後者は廃止や建物の解体によるものであることから、同地での再建の計画は無かったと思われる。つまり、両者は同じ空地でも、その土地の置かれている状況は異なっていたものと考えられる。

明治期初頭の塔頭の廃止や統合については、『寺院明細帳』⁽²¹⁾や『京都府寺誌稿』⁽²²⁾に関係する記述が見られる。これによると、まず明治3(1870)年に惣門外の瑞応院が鹿王院に合併され、次いで同4年に龍昇院⁽²³⁾・景德寺・延慶庵(惣門外)、同5年の福寿院・喜春軒の廃止と続く。福寿院は慈濟院との合併であり、喜春軒は上嵯峨に所在した塔頭の招慶院との合併であった。招慶院は、喜春軒の建物を利用するかたちで移転し、もとの招慶院の敷地と建物は同年8月5日に上嵯峨・天龍寺・水尾・原・越畑の5村が連合して設立された上嵯峨校(現、嵯峨小学校)へ転用されている⁽²⁴⁾。

このように、明治元年の天龍寺では建物の存在しない塔頭が存在していたが、これらは他の地域で見られた廃仏毀釈による破壊ではなく、元治元年の兵火による焼失や「取畳」によるものであった。また、京都府下の各地で行われた塔頭の廃止や統合は、天龍寺でも確認された。これらと時期を同じくして実施されたのが最初の土地令に基づく境内地の限定である。

(2) 近代初頭における天龍寺境内地の復原

1) 天龍寺の境内地処分と関係資料

境内地処分の段階は、大きく分けて2段階であり、まず明治4(1871)年正月5日の太政官布告において、社寺の領有する土地のうち「現在ノ境内」を除いた土地の土地が通達された⁽²⁵⁾。この時に対象とされたのは、社寺が領有していた朱印地・黒印地・除地などであり、天龍寺でも1720石の寺領が天龍寺の支配から離れた。第1次土地令では、「現在ノ境内」の範囲が明記されなかったため、その後に境内と境外を区別する基準が示された。境内は「従前ノ坪数反別ニ不拘相当ノ見込ヲ以テ」区別されることとなり、土地の対象が境内付属地の田畑、山林、荒地にまで拡大された⁽²⁶⁾。このように、第1次土地令では境内地以外の領地と境内付属地の一部が境外として収公されている。

次の段階は、明治8年6月29日の「社寺境内外区画取調規則」⁽²⁷⁾である。第2次土地令では、境内を「祭典法要ニ必需ノ場所」に限定し、建物を焼失した社堂のうち仮設で再建の見込みのある場合は、旧建物に依じて相当の敷地を境内と定め、仮設のまま据え置くものは建物の景況をみて処分するとされた。このように、第2次土地令では境内の範囲がより厳密に規定され、それ以外の場所は境外土地となった。これにより、天龍寺では境内地が旧境内地の約3割に削減され、約7割が収公された⁽²⁸⁾。なお、収公された境内以外の土地は、一部が国や府県の土地とされた他は社寺を含めて一般に払い下げられている。

以上の通り、境内地処分は二度の土地令と関連法令に基づいて段階的に実行されたが、これらの実施に伴い境内とそれ以外を区別する調査や処分に関する文書・図面類の作成が行われて

いる。天龍寺の所在する京都府でも、『京都府庁史料』の中に「社寺境内外区別取調」⁽²⁹⁾の資料群が残るため、境内地処分の状況を知ることができる。なかでも、主な地図資料は、第1次上地令のもとで作成された「社寺境内外区別原図」（「原図」）、第2次上地令のもとで作成された「社寺境内外区別図」（「区別図」）・「社寺境内外区別図面」（「区別図面」）の3点であり、この他に処分の結果をまとめた「社寺境内外区別取調帳」（「取調帳」）が存在する。

天龍寺の境内地処分関係資料としては、「取調帳」と「区別図」のみが現存し、このうち「区別図」は、その記載内容から「区別図面」の関係図とみられる⁽³⁰⁾。また、第2次上地令の下で行われた境内外区別の再検査の結果を記録した地図⁽³¹⁾が残るため、これらの地図資料から当該期の天龍寺境内地の様子を知ることができる。その一方で、天龍寺の「原図」は現存していないため、これを用いて明治期初頭における天龍寺境内地の様子や第1次上地令に基づく処分の状況について検討することができない。

2) 「天龍寺惣絵図」の検討

第1次上地令を受けて、京都府では寺院・神社に対して境内地を描いた絵図と取調書の作成・提出を命じ、これをもとに実地見分を行い、境内地の範囲を確定していった。天龍寺でも、明治4（1871）年8月18日に「一山境内惣絵図面」を提出したことが「住山記録」⁽³²⁾に記されている。このように各社寺から提出された絵図が『京都府庁史料』の「原図」である。しかしながら、葛野郡の簿冊中に天龍寺の「原図」は残されていない。そこで、筆者は境内地処分のもう一方の当事者である天龍寺の文書群の調査を行い、年代未詳ながら「天龍寺惣絵図」⁽³³⁾と題した絵図を見出した。この「惣絵図」は、その記載内容から「原図」に類する図と推定される。以下、記載内容を中心に「惣絵図」の検討を行う（図1）。

「惣絵図」の記載範囲は、東は瀬戸川東岸、西は境内主域の左側に山並みを絵画的に描写して「裏山」と記し、山麓北端には池と鳥居を描く。これらは、その位置から亀山より小倉山までの山稜と、小倉池並びに弁天社（現、御髪神社）と考えられる。また、南は大堰川と渡月橋、北は概ね「野宮社」（現、野宮神社）までの範囲を描いている。

「惣絵図」を一瞥して気付くことは、対象によって書き方に精粗の差が見られる点である。境内主域は、方丈以下の建造物、門や橋などを詳細に記し、塔頭についても敷地割と塔頭名を記している。神社は鳥居形でその位置を示し、八幡社は社殿を素描している。絵図風の表現は亀山の描き方も同様で、「惣絵図」には樹木も描き込まれている。これに対して、門前に広がる境内付属地の宅地は「民家」と表記するのみであり、屋敷割や居住者名などは記載されていない。また、土地利用についても「藪」・「林」と記されるに過ぎない。このように、「惣絵図」の記載から推定して、その主たる関心は境内主域の状況を把握することにあり、さらには境内地の土地利用を記録することにあるとみられる。

続いて「惣絵図」の作成年代であるが、図中には図題が記されるのみであり、作成者や年代

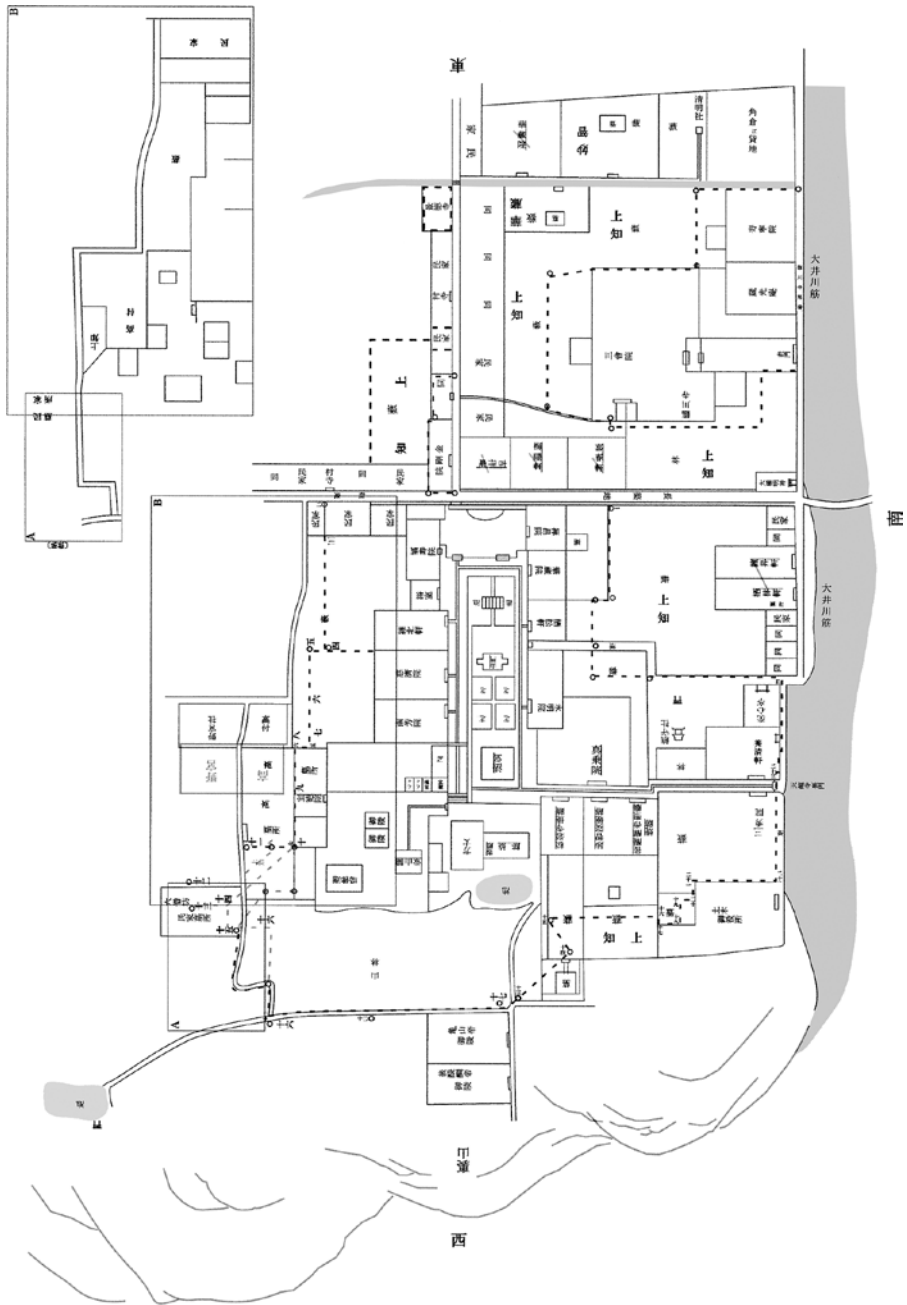


図1 明治期初頭の天龍寺境内地

※「天龍寺惣絵図」(『天龍寺文書』No.1406)をトレースして作成。傍線付きの表記は、原図で朱書きのものを表している。なお、塔頭名に付した斜線は、原図では青墨で引かれている。

に関する記述は一切無い。そこで、記載内容をもとにその景観年代を推定してみる。寺院の境内を描いた絵図の景観年代を考える際に基準となるのが、境内主域の主要施設の有無や塔頭の名称であり、これを検討することにより「惣絵図」の景観年代の推定が可能となる。

まず、境内主域を見ると、方丈・開山堂・客殿・法堂・山門が記されている。このうち、方丈は墨書きなのに対して客殿以下は朱書きであり、書き方に違いが見られる。「惣絵図」全体を見ると、基本的には墨書きであり、堂舎や塔頭名の一部が朱書きされていることから、意図的な書き分けをしていることが窺える。朱書きは、塔頭の宝徳院・真乗院・栖林軒・龍昇軒・吉祥庵・梅陽軒・喜春軒・華蔵院でもなされ、このうち宝徳院・龍昇軒・梅陽軒は「取調書上帳」で「取量」と表記され、吉祥庵は山門と共に「跡」とされた塔頭である。この他に、客殿・松岩寺・妙智院・後醍醐帝聖廟では朱書きと共に「焼跡」と記され、これは元治の兵火の「焼跡」を意味している。しかしながら、同じく罹災した塔頭でも慶応2（1865）年に再建された永明院と三秀院は墨書きであることから、未再建の建物や塔頭が朱書きされていることが分かる。なお、これらの何れにも含まれない栖林軒と華蔵院が朱書きされている点については、明治3年の境内図⁽³⁴⁾に「栖林軒旧跡」とあるため、栖林軒はこの時までには廃寺であったとみられる。また、華蔵院は、禅昌院と栖松軒の間に記されていることから瀬戸川左岸には存在していない。以上の通り、書き方の違いを整理したところ、「取調書上帳」で「取量」「跡」とある施設や塔頭、元治の兵火で罹災した建物や塔頭の未再建分が朱書きされていると考えられ、現存している施設や塔頭は墨書きすることで両者を書き分けたものと判断できる。

それでは、塔頭名の書き方に注目して、移転や廃止など明治初年に異動のあった塔頭を基準に景観年代の絞り込みを行う。まず、年代の下限に関しては、明治5（1872）年2月の喜春軒と招慶院の合併とそれに伴う招慶院の惣門内への移動が挙げられる。「惣絵図」では、喜春軒を惣門外に記すが、これは前述の「絵図目録」に「天龍寺惣地坪之内」とある点と矛盾する。「取調書上帳」の境内図を見ると、喜春軒の位置には福寿院が記され、両寺の位置が入れ違いになっていることが分かる。しかしながら、福寿院が惣門内に存在したことは、「住山記録」に記述が見え、これによると招慶院が惣門内へ移転する際に福寿院の建物をそのまま招慶院へ譲渡し、福寿院は後に慈濟院へ合併する予定であるとして、招慶院が福寿院の建物を利用して惣門内に移転したことが分かる。つまり、福寿院がかつて喜春軒のあった場所に明治5年の段階で存在していたことは確かであり、「惣絵図」の記載は正しいことが分かる。このように、招慶院が惣門内に移転する前の状態を示しているため、下限が明治5年2月を超えることはない。次に、明治4年に廃止された景德寺を見ると、寺名が墨書きされ廃寺前の状態として記されていることから、下限が更に引き上がる。これに対して上限であるが、栖林軒が明治3年には「旧跡」になっている点から判断して明治3年以降となる。以上の分析から「惣絵図」の景観年代は、明治3年から明治4年までの間と考えられ、第1次上地令の出された明治4年と概ね一致する。

「惣絵図」では、丸印と破線で囲まれた箇所が数ヶ所存在する。天龍寺の境内主域、臨川寺とその周辺、金剛院とその周辺、造路北側の民家（1区画）、そして景德寺である。類似の記載は、第1次上地令のもとで明治4年から5年に作成された「原図」で見られるため、この点と上記の景観年代の推定から、筆者は「惣絵図」を「原図」に類する図と判断する。但し、他の寺院の「原図」と「惣絵図」を比べると、幾つかの違いに気付く。試しに大覚寺の「原図」⁽³⁵⁾と「惣絵図」を比較すると、大覚寺の「原図」は墨書きであり、第1次上地令によって境内と判断された範囲を朱書きの丸印と実線で囲み、新境内の範囲を示している。そのため、「惣絵図」に記された丸印や破線もその範囲から第1次上地令に基づく天龍寺の新境内を示したものとみられる。しかしながら、「惣絵図」では丸印と線の色が朱書きではなく墨書きであり、線種も実線ではなく破線と異なっている。加えて、他の「原図」が境内外区別の結果を示すものとして、境内外を区別する線を1本引いているのに対して、「惣絵図」では選仏場北側で複数の線が引かれている。また、丸印に数字の付された箇所では、同じ数字が複数存在するなど、記載が一様ではない。さらには、境内北辺部に貼紙を用いて情報の修正を行ったと思われる箇所もあり、これも「原図」には見られない。

このように、「惣絵図」には「原図」と異なる点が多く見受けられる。このため、「惣絵図」は単に第1次上地令に基づく境内外区別の結果を示した絵図ではない。従って、現段階では複数の区別線と付された2種類の数字、貼紙から京都府が境内外区別の案を天龍寺に提示するために作成したものと推定しておく。

(3)「天龍寺惣絵図」にみる天龍寺境内地

前節では「惣絵図」の資料的検討を行い、その景観年代が塔頭の記載より明治3年から同4年までの間と推定された。ここでは、「惣絵図」をもとにこの頃の天龍寺境内地の状況について詳しくみていく。まず、「惣絵図」の中央には、渡月橋から北へ延びる長辻が描かれ、「長築地」と記されている。長築地の西側が天龍寺の境内主域、東側が臨川寺と諸塔頭、それに門前の集落となる。門前の集落は、天龍寺門前の村落の一部である。

境内主域は、その北半部に天龍寺の諸施設が建ち並び、芝・山門跡・池を挟んだ両側に塔頭が薨を連ねる。選仏場と方丈の北側は亀山の東麓部になるため「山林」と記され、慈濟院など塔頭の背後にも藪地が広がる。法堂の前から南へ伸び、大堰川畔の「天龍寺裏門」へと続く通路の両側も大半が塔頭敷地であるが、元治の兵火で焼失した松岩寺・妙智院・聖廟と真乗院は未再建のため、この辺りは建物の建たない一画であったと推察される。その南は、三秀院や養清軒までの間に藪地・林地が見られる。

三秀院の西には、「土木御役所」とある。この土木御役所は、境内地処分の関係資料に「復改所」と記される官営施設であり、大堰川を流れ下る材木筏に対する運上の徴収を行うため、明治2（1869）年8月に上流部の亀岡の運上所を廃止し、同地に營繕司（同年に民部省土木

司と統合）が設置したものである⁽³⁶⁾。鎮守の社務である洗心亭の北には、鎮守社（八幡宮）の社殿と鳥居が描かれている。明治初年の神仏判然令により、神社内の寺院は禁止され取り壊しとなったが、寺院内の神社は許されていた⁽³⁷⁾ため境内にそのまま存在し続けたと推察される。なお、塔頭敷地や民家の背後には藪地が広がる。

長辻の東側には、臨川寺周辺の塔頭群と門前の集落が記されている。集落は「麓絵図」の頃と同じく長辻や造路の両側に広がり、その中に「村寺」とあるのは、浄土宗寺院の般舟庵と妙春庵で「天龍寺門前町ノ総堂」⁽³⁸⁾であった。しかし、宅地が広がるのは道路沿いのみであり、臨川寺の周囲は大堰川に面する南側以外の三方が藪と林に囲まれ、瀬戸川沿いも大半は藪地であり、他の土地利用としては寿寧院の対岸に「角倉江貸地」があるくらいである。この場所は嵯峨角倉家の屋敷地に当たることから、嵯峨角倉家は天龍寺より土地を借りて屋敷地を営んでいたと思われる⁽³⁹⁾。

以上のように、近代初頭の天龍寺境内地は、天龍寺の堂舎や塔頭群からなる境内主域を中心に境内付属地の宅地や藪地などから成っていたが、門前の集落は道路に沿って伸びる列村状であり、塔頭と集落の背後は藪地や林地が広がっている状態であった。この境内付属地を対象として行われたのが、第1次上地令に基づく境内外の区別と境外地の土地であるが、天龍寺境内地ではどのように行われたのであろうか。基本的には、他の寺院の「原図」と同じく丸印と線で囲まれた内側が境内と判断され、それ以外は境外として上地されたと考えられる。天龍寺では境内主域（惣門・方丈・裏門を繋ぐ通路の両側の塔頭群及び背後の藪地）、臨川寺と寿寧院・蔵光庵、金剛院と隣接する宅地及び背後の藪地、景德寺が丸印や線で囲まれていることから、これらが新規の境内とされ、惣門前や大堰川畔の建物のない塔頭と廃寺、それに境内付属地の宅地・藪地などの大半は境外と判断されたとみられる。これらの中には、「上知」と墨書きされた藪地があり、明治8年の再検査時の「再検査結果図面」⁽⁴⁰⁾で確認すると、大半が「府限」と書かれた京都府の公有地と一致する。また、「上知」とは異なる筆跡で「華蔵」「妙智」と書き入れられた箇所が瀬戸川沿いに見られ、この地は「麓絵図」の華蔵院・妙智院の寺地に当たることから塔頭旧跡を示す記載とみられる。さらには、朱書きされた塔頭のうち、大堰川畔に記された栖林軒と龍昇軒、惣門前の吉祥庵・梅陽軒・喜春軒、瀬戸川左岸の華蔵院の6ヶ寺は塔頭名が朱書きされた上に青墨で斜線が引かれている。これらは、何れも境内を表す破線の外側に位置し、廃寺や建物の存在しない塔頭であったことから境外と判断され、斜線が施されたと推察される。なお、「惣絵図」の丸印「二」は、惣門北側の民家を数軒境内に含むように長辻に面して記入されている。しかし、「再検査結果図面」では、第1次上地令に基づく境内である「最初新境内見込」に含まれていないため、境外として上地されたと思われる。

このように、第1次上地令の境内は「相当ノ見込ヲ以テ」区別されたことから、塔頭背後の藪地を含んでいた。これが、第2次上地令で境内の範囲を「祭典法要ニ必需ノ場所」と限定した際に問題となり、再検査では境外土地と判断された。境内地処分の結果、天龍寺の境内地は

処分前の約36町から約10町5反に縮減⁽⁴¹⁾され、残りの25町余は収公された。

4. 天龍寺境内地の景観変化

(1) 境内主域の景観変化

前章では、境内地処分に関係して作成された地図資料をもとに、近代初頭の天龍寺境内地の復元的考察を行ってきた。しかし、境内地処分の関係資料は境内・境外の区別とその処分に関わって作成されており、関心の外にある情報は境内地に存在していたとしても捨象されている。そこで、課題となるのが境内地処分の関係資料からは読み取れない境内地の景観要素の復原であろう。以下では、境内主域について、他の資料からこの点を検討する。

京都府では、明治2(1869)年7月に「桑漆茶蘆等ノ良木ヲ所在隙地ニ栽培」⁽⁴²⁾するよう府下へ触が出され、山野・荒蕪地はもとより社寺境内地の空闲地を活用して、良木の栽培を行うことが奨励された。これを受けて、各地の寺院では桑や茶の栽培が行われたようであり、明治6(1873)年の新聞⁽⁴³⁾には、東京や神戸などへの移住による檀家の減少や寺領の上知に伴い無禄となったことで寺院の経営が成り立たず、「不要ノ塔観ヲ典却シ其価ヲ以テ地所ヲ開墾シ、桑茶ノ類ヲ培植シ、製茗養蚕ヲ専」らにすることで漸く暮らしが立つという記事が掲載されている。この記事から、荒廃する境内の様子や経済的に困窮する寺院の状況が窺い知れ、養蚕に用いられる桑や商品作物の茶などを栽培していたことが知られる。養蚕によって得られる生糸や茶は、近代初頭の主要な輸出品でもある。

こうした状況を示す資料が『天龍寺文書』の「総門内開墾地図面」⁽⁴⁴⁾であり、境内主域に当たる総門(惣門)内の開墾地について、位置・面積・開墾者などを記録している(表2)。作成年に関する記載を欠いているが、冒頭に明治8(1875)年の立会検査に関する記述や「当年蒔茶 但亥年蒔」とあることから、明治8年(干支は乙亥)の作成であることが分かる。表2を見ると、記載は方丈跡や雲居祖塔并侍真寮跡、禅堂の周辺と亀山の東麓部といった境内西北部の開墾地に始まり、境内中央部の法堂・山門跡と塔頭の前面地に拓かれた茶園へと続く。これらの土地は「慈濟院受地」のように塔頭が請け負い、開墾した上で「蒔茶」をしていた様子が読み取れる。

図2は、「総門内開墾地図面」に収録されている「常住前亀甲段ヨリ中門迄開拓茶苑縮図」から作成したものである。これを見ると法堂跡とその周辺から通路に挟まれた狭小地、さらには塔頭前面の僅かな土地まで開墾し、茶を栽培していた様子が読み取れる。また、開墾と蒔茶の時期は、法堂跡に「七年茶 但巳年蒔付」とあることから、京都府による触が出された明治2年に開始されていることが分かる。

境内での茶の栽培が何年頃まで行われたかは不明であるが、明治22(1889)年の仮製地形図⁽⁴⁵⁾では天龍寺の境内地に茶の地図記号が確認されるため、この頃までは茶の栽培が行われ

表2 天龍寺境内地における開墾地の状況

No.	開墾場所	開墾面積			記号	備考
		坪	歩	厘		
1	方丈跡茗園	615	5	7		
2	禪堂裏山裾開拓所	524	5	8		
3	雲居祖塔并侍真寮跡開墾	313	2	0		
4	禪堂廻り開墾地	232	3	3		
5	禪堂裏山裾開墾	924	3	8		
6	字田淵山裾新田開拓	331	6	8		

No.	開墾場所	開墾面積			記号	備考
		坪	歩	厘		
7	慈濟院受地 法堂跡北之方	65	1	3	ハ	午年蒔茶
8	同上	34	0	1	ニ	戌年蒔茶
9	慈濟院受地 法堂跡西之方	69	7	6	ホ	亥年蒔茶
10	慈濟院受地 法堂跡東之方	119	7	2	ル	亥年蒔茶
11	慈濟院受地 真乗院高塀北	62	5	9	ヲ	亥年蒔茶
12	慈濟院受地 唐門跡東之方	19	7	1	ロ	亥年蒔茶
13	同上	5	7	5	イ	亥年蒔茶
14	慈濟院受地 山門壇	172	1	6	ワ	未年蒔茶
15	慈濟院受地 八幡境内南之方	282	2	3	一	亥年蒔茶
16	松岩寺受地 法堂跡	303	5	0	ヌ	巳年蒔茶
17	松岩寺受地 法堂跡南之方	12	0	0	リ	亥年蒔茶
18	同上	13	3	3	チ	酉年蒔茶
19	同上	38	4	8	ヘ	申年蒔茶
20	同上	10	7	8	ト	亥年蒔茶
21	妙智院受地 勅使門南脇	21	6	3	タ	—
22	同上	49	8	3	ヨ	亥年蒔茶
23	弘源寺受地 山門壇東之方	199	2	2	カ	戌年蒔茶
24	弘源寺受地 石橋西之方	28	8	3	ツ	亥年蒔茶
25	弘源寺受地 浴室跡之前	51	3	6	レ	亥年蒔茶
26	招慶院受地 浴室跡	84	6	4	ソ	—
27	弘源寺受地 同上	14	0	8	○	—
28	弘源寺受地 選佛場東	129	7	0	—	—
29	常住持 亀甲段之下両側茶園北之方	24	0	0	子	午年蒔茶
30	常住持 亀甲段之下両側茶園南之方	23	0	0	子	午年蒔茶
31	松岩寺前茶園	20	5	0	ナ	午年蒔茶
32	松岩寺前茶園南之方	5	0	0	マ	—
33	松岩寺前茶園北之方	8	0	0	マ	—
34	慈濟院前茶園西之方	19	2	5	ラ	午年蒔茶
35	同上	4	5	0	ラ	午年蒔茶
36	慈濟院前茶園東之方	12	1	6	ム	午年蒔茶
37	弘源寺前茶園	11	6	6	ウ	午年蒔茶
38	永明院前茶園西之方	27	4	1	キ	申戌蒔茶
39	永明院前茶園東之方	20	8	8	ノ	亥年蒔茶
40	栖松軒前茶園南之方	20	0	8	オ	申年蒔茶
41	栖松軒前茶園北之方	22	0	0	ク	申年蒔茶
42	華蔵院前茶園	8	0	0	ヤ	亥年蒔茶
43	妙智院前茶園	11	0	0	ケ	—
44	真乗院前茶園	82	4	2	フ	亥年蒔茶

—…記載無し

※「総門内開墾地図面」（『天龍寺文書』No.1428）より作成。

明治8（1875）年の状況を示す。なお、同年の干支は乙亥。

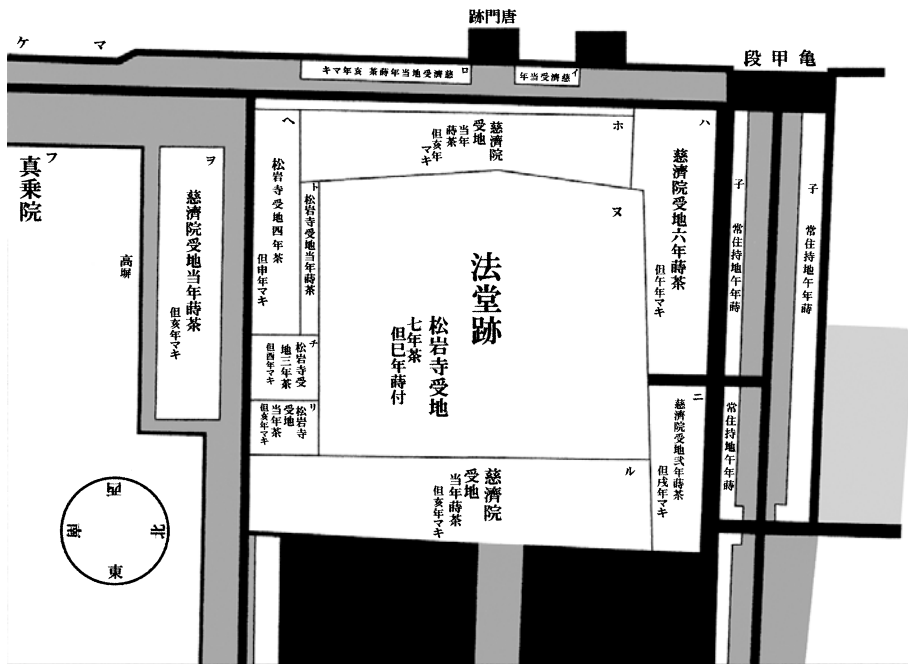


図2 天龍寺境内主域の開墾地（部分）

「常住前亀甲段ヨリ中門迄開拓茶苑縮図」（「総門内開墾地図面」所収）をトレースして作成。図中のイロハ記号は、表2と対応。

ていたことになる。仮製地形図を見ていると、妙心寺や大徳寺など他の寺院の境内地でも茶の地図記号を確認することができることから、境内の開墾と茶の栽培は天龍寺に限った事象ではなく、他の寺院境内地においても行われていたものと考えられる。

(2) 旧境内地の変化

天龍寺では、境内外区別によって境内地の約7割に相当する25町余が境外と判断され、旧境内地となった。これらの旧境内地は、一部は公有地とされたが、大半は民間へ下渡・払下が行われて民有地となり、天龍寺の支配から離れた。境内地処分の結果は、明治17・18（1884・85）年の景観を描く「区別図」に記されているが、明治4年頃の「惣絵図」と明治8年頃の「再検査結果図面」、「区別図」を並べてみると、旧境内地を中心に景観の変化している様子が読み取れる。

図3は、「区別図」をもとに「再検査結果図面」と「区別図」を比較してその間に土地利用が変化した箇所を破線で示した図である。これを見ると、かつての境内主域南部の状況が大きく変化していることが分かる。取り分け、第2次上地令を受けて松岩寺・妙智院など元治の兵火の罹災塔頭が建物を有する他の塔頭との合併により境内主域北部へと移転したことに伴い、再検査時は空地であったこれらの塔頭敷地の大部分が畑地化している。また、再建された三秀

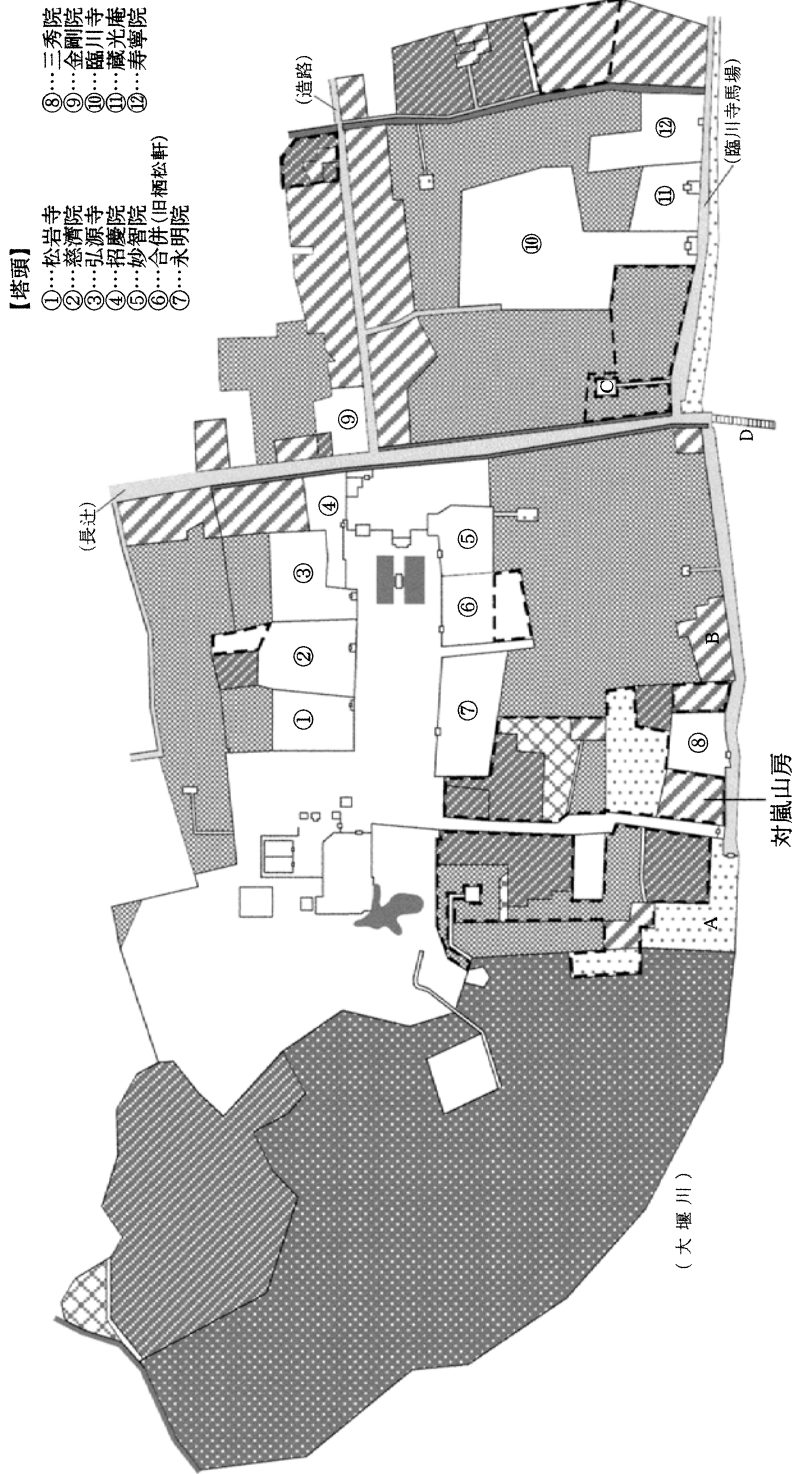


図3 天龍寺境内地と旧境内地

※京都府立総合資料館蔵「社寺境内外区別図」(『京都府庁史料』明16-48-追1)より作成。明朝体表記と括弧付きの表記は、筆者による加筆である。本図は、明治17(1884)年12月から翌18年10月までの状況を表しており、明治8(1875)年からの10年間に変化が見られた箇所を破線で囲んでいる。

院も養清軒と合併して大堰川畔に寺地を移しているため、その跡地が畑地・藪地などに変化している。これに、「惣絵図」に見られた旧塔頭敷地の存在を加えると、金剛院南側の長辻東側や三軒屋の東側の塔頭跡地、景德寺跡が藪地と化している。他の変化では、塔頭跡地・藪地・畑地の宅地化が確認され、吉祥庵跡、三秀院の両側（養清軒の敷地西半部・洗心亭跡地）、角倉家屋敷地北側が宅地となっている。宅地化した場所の多くは、既存宅地に隣接する場所である。

このように、天龍寺では二度の土地令によって境内の範囲が大幅に縮減され、土地された旧境内地では塔頭跡地などで土地利用に変化の生じたことが確認された。こうした変化の背景にあるのが、土地された旧境内地の下渡・払下による門前集落の住民などへの譲渡であろう。天龍寺では、明治4（1871）年8月18日に境内の絵図を京都府へ提出し、同月27・28日に実地検分を受けて第1次土地令に基づく境内と境外の区別がなされ、惣門内の約3町が土地されているが、この時点で、門前の集落や藪地などは殆ど境外として収公されている⁽⁴⁶⁾。「取調帳」⁽⁴⁷⁾によると、明治5年5月に藪地を天龍寺や鹿王院へ「相当代価」にて払下が行われ、次いで明治8年1月には人民居住地1町5反4畝余が43名へ下渡（無償譲渡）されている。面積からみて、門前の集落と推定され、これらの土地が門前の住民の所有地となったことが分かる。また、宅地以外にも畑地や藪地の多くが払下により民有地となっているが、一部の畑地や藪地は天龍寺や塔頭にも払下となっている。下渡・払下の結果、かつての天龍寺門前（明治8年から天龍寺村）の住民などが土地を所有するようになり、天龍寺とは無関係に居宅建設や耕作などの諸活動を自由に行えるようになったことが、旧境内地の景観変化を生み出したものと考えられる。

旧境内地での住宅建設などの活動は、天龍寺村の住民に限るものではない。「取調帳」に記される山中猷による山荘建設がその一例である。山中猷（信天翁・静逸）は、明治天皇の御用係や桃生県（後の石巻県）知事などを務め、詩文や書画に秀でた人物として知られ、官を辞した後に東京から京都の下鴨へ移り住み、明治9（1876）年の秋頃から大堰川北畔に対嵐山坊の建設を開始している⁽⁴⁸⁾。翌年2月18日には、京都行幸中の明治天皇が木戸孝允などと訪問⁽⁴⁹⁾しており、現在も「明治天皇行在所山中邸趾」の石碑が対嵐山坊の跡地に残されている。この場所は、旧養清軒の西半部に当たる（図3）。「取調帳」には、明治10（1877）年5月に1反7畝23歩の土地を「自費建家居住」を理由に、山中へ払下を行ったことが記録されている。このように、他地域の者であっても天龍寺を介さずに住宅を建設したり、土地を取得したりするなどの活動が行えるようになったことが、境内地の頃と比べて大きく変化した点である。

山中の対嵐山坊の他に、著名な人物による住宅建設の例は見られなかったが、景勝地の嵐山を望む大堰川畔の旧境内地は、別荘や旅館の建設に好立地であり、明治20年代後半からこれらの建設が行われる⁽⁵⁰⁾。現在、天龍寺の界限は、京都有数の観光地であると共に、閑静な住宅地としても知られる。これらの景観は、境内地処分により広大な土地が天龍寺の支配を離れ、

民間による土地取得と売却、開発が可能になったことによって齎された変化の結果として存在しているのである。

5. おわりに

本稿では、寺社を中心に形成された地域の景観に影響を与えた事象として、近代初頭に行われた境内地処分に注目し、関係して作成された地図資料と寺院側に残された資料などを用いて天龍寺境内地を復原し、近世から近代へと移行するなかで生じた景観の変化について検討を行ってきた。得られた知見は、以下の通りである。

近世後期の天龍寺には、嘉永期の段階で42の塔頭が存在し、このうち30ヶ寺が天龍寺築地内と臨川寺の周辺に位置していた。天龍寺の東側には天龍寺門前の集落が広がり、集落の家並みと塔頭が軒を連ねる状況にあった。第1次上地令に際して作成された「惣絵図」にみる天龍寺境内地では、元治の兵火からの再建が進まず空地のままの罹災塔頭、それまでに建物を失うか廃寺により建物を取り壊した塔頭、整理統合により他の塔頭と合併した塔頭が多く見られ、これらの塔頭敷地が二度の上地令で境外として上地になり、収公された旧境内地は公有地や民有地となった。民有地となった旧境内地は、天龍寺を介さずに住宅建設や耕作などの諸活動が行えるようになり、旧塔頭敷地や敷地などが宅地や耕作地に変化した。また、京都府の通達を受けて明治2（1869）年から天龍寺の境内主域では開墾と茶の栽培が行われており、景観の変化は境外と判断されて民有地となった旧境内地だけでなく、境内においても発生したことが確認された。

本稿では、天龍寺の境内地処分に注目し、各種の資料から境内地の復原を行い、近世から近代へと移行するなかで生じた塔頭の減少と跡地の土地、境内の内外で発生した景観の変化を明らかにした。また、塔頭の減少、寺院境内地の縮小と旧境内地の開発、寺院境内の開墾と茶栽培という当時の寺院を中心とする地域に共通する事例を確認することができた。しかし、現在の天龍寺界限に通じる旅館の建設や公園の整備といった旧境内地の観光地化が未検討の課題として残されている。さらには、大覚寺・二尊院・清涼寺といった隣接する寺院境内地との検討や京都の他の寺院境内地との比較も行う必要があり、これらの点を検討することにより天龍寺を中心とする地域の特性が明らかになるだろう。以上の点を今後の課題として、稿を終える。

〔注〕

- (1) 藤本利治「門前町の形成と社寺の機能—伊勢国山田の場合」歴史地理学紀要10、1968、23～39頁。
- (2) 近年の近世門前町に関する歴史地理学の研究としては、次の論文などがある。岡宏三「絵図を通してみた門前町杵築（大社）」歴史地理学222、2005、43～59頁。
- (3) 渡邊秀一「東西本願寺門前町の形成過程と変容」（河村能夫編著『京都の門前町と地域自立』龍谷大学社会科学研究所叢書76、晃洋書房、2007）、22～57頁。

- (4) 大蔵省管財局編『社寺境内地処分誌』、大蔵財務協会、1954、32頁。
- (5) 渡邊秀一・木村大輔・小林善仁・藤井暁「嵯峨諸寺門前地の近代の変容に関する予備的考察」
佛教大学アジア宗教文化情報研究所紀要3、2007、1～59頁。
- (6) 拙稿「山城国葛野郡天龍寺の境内地処分と関係資料」鷹陵史学36、2010、1～23頁。以下、前稿と略記する。
- (7) 京都市編『京都の歴史』、学藝書林、1974、524～545頁。同書では、天龍寺の所在する京都市域における神仏分離や廃仏毀釈の状況、寺院の整理統合や廃絶について詳述されている。
- (8) 「天龍寺境内惣支配所六ヶ村龜絵図」(『天龍寺文書』No.1540)、安永5(1777)年。なお、『天龍寺文書』については、京都府立総合資料館所蔵の写真帳を使用した。以下、「龜絵図」と略記する。
- (9) 「絵図目録」(『天龍寺文書』No.1464)、嘉永3(1850)年。
- (10) 奈良本辰也監修『天龍寺』、東洋文化社、1978、133～136頁。
- (11) 京都府庶務課社寺掛「葛野郡寺院明細帳」(『寺院明細帳』25)天龍寺・永明院・三秀院分、明治13(1880)年、京都府立総合資料館所蔵。以下、『寺院明細帳』と略記する。
- (12) 嵯峨野々宮町自治会共有文書「明細帳」(京都市『史料京都の歴史』14 右京区、平凡社、1994所収)、472・473頁。
- (13) 下中邦彦編『京都市の地名』日本歴史地名体系27、1979、1080頁。同書では、「天龍寺門前村」とするが、天龍寺門前とする方が適切と考える。
- (14) 峨山青護翁『洛西嵯峨名所案内記』(野間光辰編『新撰京都叢書』1、臨川書店、1985、310～353頁 所収)、嘉永5(1852)年。
- (15) 『官有地籍図』官141「嵯峨天龍寺」、京都府立総合資料館所蔵。景観年代は、塔頭の状況より明治18年頃と推定される。
- (16) 「社寺境内外区別図」天龍寺分、京都府立総合資料館所蔵『京都府庁史料』明16-48-追3。
- (17) 京都町触研究会『京都町触集成』13 明治元年～明治4年、岩波書店、1987、266・277頁。
- (18) 「執奏寺領御除地取調書上帳」(『天龍寺文書』No.1418)、明治元年12月。以下、「取調書上帳」と略記する。
- (19) 『社寺録 五山派並大寺ノ部』、京都府社寺掛、明治3年10月改、明3-35-1、京都府立総合資料館所蔵。
- (20) 「龜絵図」によると、宝徳院の位置には禪昌院と記され、明治8年の再検査時の図面にも同地に「禪昌寺跡」と記されることから、禪昌院の旧寺地と考えられる。
- (21) 前掲11。
- (22) 湯本文彦『京都府寺誌稿』天龍寺 上、明治26(1880)年、京都府立総合資料館所蔵。
- (23) 前掲22には龍華院とあるが、同名の塔頭は嘉永3年の『絵図目録』に見られないため、龍昇軒の誤りとみられる。
- (24) 嵯峨小学校所蔵文書「沿革略史」(京都市『史料京都の歴史』14 右京区、平凡社、1994所収)、523頁。
- (25) 内閣官報局編『法令全書』4(明治4年)、原書房、1974、5頁。以下、第1次上地令と略記。
- (26) 前掲26、222・223頁。
- (27) 内閣官報局編『法令全書』第8巻ノ2、原書房、1975、1666頁。以下、第2次上地令と略記する。
- (28) 「社寺境内外区別取調帳」天龍寺分、京都府立総合資料館所蔵『京都府庁史料』明16-48-追1。
- (29) 京都府立総合資料館歴史資料課編『改訂増補文書改題』、京都府立総合資料館、1993、95・96頁
- (30) 前掲6。
- (31) 「葛野郡下嵯峨村天龍寺境内再検査結果伺」京都府庁文書 明7-21-6、京都府立総合資料館所蔵。以下、伺書の添付図面を「再検査結果図面」と略記する。
- (32) 「住山記録」(『天龍寺文書』No.1427)、明治2～7年。

- (33) 「天龍寺惣絵図」（『天龍寺文書』No.1406）、年未詳。
- (34) 「天龍寺塔頭寺地図面」（『天龍寺文書』No.1429）、明治期。本図は、『京都府庁史料』の『寺地画図』の天龍寺側の控図とみられることから、作成年を明治3年と推定した。
- (35) 「社寺境内外区別原図」大覚寺分、明治5（1872）年、京都府立総合資料館所蔵『京都府庁史料』明5-47。
- (36) 「御達書之写」（野田只夫編『丹波国黒田村史料』、黒田自治会村誌編纂委員会、1966、419・420頁所収）、明治2（1869）年。
- (37) 京都市『史料京都の歴史』5 社会・文化、1984、604～606頁。
- (38) 前掲19。
- (39) 『天龍寺文書』No.1500～1513に、嵯峨角倉家の屋敷や小屋町に関する史料が残る。
- (40) 前掲31。
- (41) 前掲28。
- (42) 京都府立総合資料館『京都府百年の資料』3 農林・水産編、京都府、1972、36・37頁。
- (43) 『京都新聞』68号、前掲41、610頁。
- (44) 「総門内開墾地図面」（No.1428）、明治期。
- (45) 2 万分 1 仮製地形図「愛宕山」、明治22（1889）年測図、参謀本部陸地測量部。
- (46) 前掲32。
- (47) 前掲28。
- (48) 信天会編『信天翁』、大正4（1915）年。
- (49) 宮内庁『明治天皇記』4、吉川弘文館、1970、78頁。
- (50) 「旧土地台帳」（京都地方法務局嵯峨出張所所蔵）字長辻分によると、明治27（1894）年5月に東本願寺の大谷光瑩が同地を取得し、同名の別荘を営んでいる。また、近代の嵯峨・嵐山地域での観光業については、次の論文に詳しい。渡邊秀一「名所案内記からみた近代嵯峨・嵐山の観光業」鷹陵史学34、2008、1～19頁。

〔付記〕

本稿の作成にあたり、資料の閲覧を許可して頂いた天龍寺や資料を所蔵する京都府立総合資料館には大変お世話になりました。また、佛教大学の渡邊秀一先生をはじめ、諸先生方並びに院生諸氏からは貴重なご助言を頂きました。ここに記して御礼を申し上げます。

（こばやし よしと 非常勤講師）

2011年11月15日受理